

古典 31. 甲状腺腫の女性

1912 年 7 月 20 日、ある男が診療所にやって来たが中に入ろうとしない。

私を見るとすぐに、『あなたは甲状腺腫の専門家ですか？』と訊ねてきた。

私は治したことはあるが、専門家ではないと答えた。

彼は質問を繰り返し、専門家だと聞いてやってきたが、違うのなら中には入らない、と言う。私が彼に、病状を教えて欲しい、そうすればあなたに何かできるか教えられるから、と言うと、彼は、患者は妻です、と答えた。

彼女はペンシルバニアにいた。とても具合が悪く、現地の医師が、甲状腺腫は切れるが、切っても治る保証はないと言うほどだった。

私は彼に自分は甲状腺腫を治した経験があるので、彼女が帰宅したら診療所に連れてくるように言い、そうすれば彼女を診て何かできるか教えられる、と言った。彼は妻に手紙を書く、と言って帰った。

7 月 27 日、彼は妻と一緒に来た。彼女は 29 才だった。とても痩せていて、非常に神経質だった。

5 月 1 日から具合が悪く、その時から胃の調子が悪く、体調がすぐれない。こってりした脂っこい食物、豚肉等が食べられない。実質性甲状腺腫。前部の一部と左側の一部、しかし最も大きいものは右側にある。

速くて激しい心拍。目が突き出ている。子宮および卵巣に問題。

診療結果は、眼球突出性甲状腺腫。私の診断も同じだった。